

URC 設立 30 周年に寄せて～OB・OG、現役の職員からのメッセージ

(OB・OGの方は在席順です。)～

小倉 美恵氏(1988.4～1992.3)

結婚を機に、宮崎の田舎から福岡に来て3～4年後、ご近所さんの紹介で福岡市総務局企画調整部に臨時的任用職員として採用して頂いて、何年後でしたでしょうか？都市科学研究所設立準備担当の嘱託職員のお話をいただきました。昭和63年8月設立前の春頃だったと思います。

今から30年以上前、当時恒松ビルという民間ビルに事務所を構え、市役所北別館6階にオープン予定の都科研でした。フロア配置図・物品の購入リスト作り、納入業者さんとの打ち合わせ等が当面のお仕事でした。

設立後は受付及び経理事務として光吉理事長の下で働かせて頂きました。ある日突然、県庁跡地利用のコンペに関して、今は亡き黒川紀章氏が突然訪ねて見えてビックリ!!したこともありました。アニバーサリー30年のイムズビル・ソラリアビルのプレオープンに参加させて頂いたのもこの頃です。

つい最近、報道で設立当初の会長、川合辰夫氏の訃報に接し、市のお人柄や当時ご縁のあった市職員の皆様・民間企業から出向して見えていた研究員の皆様方に可愛がって頂いた日々を改めて懐かしく思い出します。

あれから30年……

今、天神ビッグバンの始動に伴い、大きく変わりつつある天神を日々眺めては、アーバンリサーチセンターURCに携われた過去を幸せに思います。同時に大好きな福岡市とURC・都市政策資料室のますますの発展をお祈りいたします。

中川 雅彦氏 株式会社 Re-Birth (1990.3～1993.1)

福岡都市科学研究所に小売業を営む民間企業から出向したときは、まだアジア太平洋センターとの統合前であり、福岡都市科学研究所の設立もない平成2年でした。

同 研究所は福岡市役所の外郭団体であり、福岡市のメンバーが主体となって運営にあたっており、そこに民間から金融関係と小売関係の企業からの出向者が加わり手探りの状況で業務を進めていました。

その紹介文には産学官が力を合わせて都市の課題を研究、提言するというように記載されていたと記憶しています。『学』のメンバーには九州大学の経済学部、工学部の教授、福岡大学商学部、工学部の教授が名を連ね、その他にも県内の様々な大学の助教授の皆様が特別研究員としていらっしゃいました。先生方を中心に福岡市のメンバーと民間の者が様々な研究テーマにそって議論を重ね、研究課題の成果を公表するなどの業務を行い、その他にもセミナーや講演会の開催などを行っていました。

民間企業の、その中でも一つの業務しか知らなかった私には、仕事の進め方や仕事に対する考え方、その他すべてがある種の驚きでもありましたし、最初は議論に入っていくこともなかなかできませんでした。しかし、自分のつたない意見にも耳を傾けていただくなど、仕事としては楽しく、充実した時間でもありました。また、それ以前とは全く異なった交友を通じて得た人脈や体験などは、今でも私のかけがえのない財産になっています。

現在はバブル期とは異なり難しい面も多々あるかと思いますが、設立当初の概念を忘れず行政、民間、それに学会を加え様々な立場の方の意見を踏まえて都市の基礎的な課題の研究をこれからも進めていただきたいと思います。

福岡アジア都市研究所の更なるご発展を衷心よりお祈りいたしております。

白水 秀一氏 岩田屋三越 (1996.6~1999.2)

20年程前『商業空間に関する研究』の際に在籍し、その一端に携わりました。

流通業界（小売）の立場から出向した者にとっては、興味が尽きないテーマでした。

と同時に、産学官の立場から検討が加えられる URIC のスタイルは、通常、商業の実務にどっぷりと浸かっていた思考を根底から見つめ直す機会になりました。

研究の過程で福岡市および近郊の商業者や行政の担当者の方にインタビューすることがありました。その中で、当時、大規模な商業施設が全くなかった近隣自治体の担当者から『今、この町の主要道路沿いに大規模なショッピングセンター（SC）が計画されている。ただ、この町の中心からも福岡市内からも遠く離れた場所で、本当に成り立っていくのか疑問です。』と言われたことがありました。

現在、その SC は開業後、面積を拡張し、広域から集客する施設になっています。福岡都市圏の発展の一面を見た思いがします。

市川 修氏(1999.4~2002.3) 福岡都市科学研究所の思い出

私は、1999年、ノストラダムスの大予言によれば地球滅亡の年に当時の福岡都市科学研究所に入所いたしました。20世紀と21世紀をまたぐ3年間お世話になりました。

幸いなことに地球は滅亡せず福岡都市科学研究所の系譜を引き継ぐ福岡アジア都市研究所として発展していることに文字通りの OB として喜んでおります。

当時の私は内心の自由により真面目な福岡市公務員と信じていました。韓国釜山市に派遣されたこともあり何故か本体からよく外に出される公務員でした。

福岡市から福岡都市科学研究所への出向辞令をもらいその辞令にはこう書いてありました。

[研究休職を命ず。俸給70%を支給する。]

子供もいるのになんて仕打ちかと辞令を返そうかと思いましたが、研究所が30%負担するとのことで、ややこしいことするところだと思いました。

着任すると、どこかのラーメン屋のように間仕切りされた机があり行政とは違う異質な空気を感じた事を思い出しております。

主な構成メンバーは市、銀行、建設会社等から派遣された方で、その方々とともに業務をこなす毎日でした。もちろん、大学の先生方の研究指導のもとです。

私が経験した行政は基本的に目の前の課題を解決、処理する仕事でしたので長期的な視点が欠けるくらいがあり研究所での経験は全体を俯瞰する良い経験でした。

ちなみに当時の理事長は伊藤滋先生でした。先生は東京に在住されていたので打ち合わせに出張しておりました。先生の事務所は各所からの相談者で門前市をなす様子です。当然、割り当て時間は、10分から15分程度でそれもなかなか取れないほどでした。先生は超多忙のなか都市科学研究所には目をかけていただき多大な貢献をさせていただいたと今でも思います。

最後に私の研究について語ろうと思いますが、残念ながら紙幅が尽きたようです。
詳細は研究所の生き字引である司書の山崎さんにお聞きください。

馬場 伸一氏 福岡市南区生活環境課長（2002. 4～2003. 3）2002 年の福岡都市科学研究所

平成 14 年（2002 年）の一年間、主査として URC にお世話になりました。季刊「URC 都市科学」Vol.54「都市とアート」の編集を担当し、当時勃興しつつあった「アートをテコにしたまちづくり」について気鋭の書き手に書いてもらいました。また当時、URC のミッションの再定義に取り組んでいた時期であり、安丸事務局長の指導のもと、「URC いかにあるべきか」について熱い議論を交わしたことも良い思い出です。

さて 2002 年といえば、サッカーの世界カップ日韓大会が開催された年です。私たちは職場旅行でたまたま 6 月 22 日の土曜日にソウルを訪れました。すると街中がとんでもない人出です。泊まるホテルの前の歩道も真っ赤な T シャツのサポーターたちでいっぱいで大渋滞。そうです、ベスト 4 進出を賭けた韓国・スペイン戦が行われている、まさにその瞬間に我々はソウルに着いたのであります。

ホテルの部屋で早速テレビ観戦すると韓国チームのチャンスには窓の外から地を震わすような大歓声。高層ビルのホテルの建物が震えていました。結局私たちもこらえきれなくなって外へ。既に入人また人。若い人が多い。ほとんど 10 代のような感じ。顔に太極旗やら赤と青の巴模様をみんなペイントしている。あちこちでパブリック・ビューイングが行われていたのですが、人が多すぎてなかなかスクリーンが見えるところが見つからず、狭い路地裏へ。そこにも既に十数人の若者が陣取って応援中。チャンスに歓声、ピンチに悲鳴。ソウル中が共鳴していました。

PK 戦になったときは見ている方が痺れました。こっちがプレッシャーでドキドキです。韓国選手が PK を決める度に花火が上がります。そして 4 本目の PK を韓国 GK がセーブしたときは、パンパンパン！と花火三連発、飛び上がって喜ぶ若者たち。そして、韓国 5 人目が PK を決め、勝利がもたらされたとき、歓喜が爆発しました！

飛び上がり、抱きつき、絶叫する若者たち。バンバンバンバンバン！・・・という花火の連発に続いて、悲鳴のような歓喜の声、感極まった女性たちが上げる金切り声が、ビル街を震撼させて長く、長く続きました。もう通りは大混乱です。ミネラルウォーターのかけ合いが始まっています。おっとビールをとばしている兄ちゃんも。喜んで商売ものの缶ジュースをタダで配っているおじさん。若い女の子たちがお互いに取りすがって、泣く、泣く・・・。

この日、街頭に出ている韓国人は、500 万人を下回らなかったと言われています。韓国人の 10 人に 1 人以上が街頭で応援をしていたということになります。そして、残りの大半は家で、職場で、テレビを見ながら手に汗握っていたに違いありません。

日が暮れる頃夕食に出かけました。号外が出ています。ヘッドラインに踊る「4」の数字。「4 強のことだよ」と韓国語のできる安丸事務局長が解説してくれました。通りのあちらこちらで若者たちが歌っています。踊っています。「テー・ハン・ミン・グ！（大韓民国）」と叫んでは、手拍子です。（「ニッポン、チャチャチャ！」に相当。つい我々もクセに。）道行く自動車が「テー・ハン・ミン・グ！」の調子でクラクションを鳴らしています。彼らが歌っているのは、「Mr. Korea」「アリラン」「第九」の替え歌（意味はわからんがなかなか感動的です。）といった応援歌。誰かが歌いだすと前の人間の肩に手を置いてつながっていき、輪ができ、ぐるぐる回る、回る。入れ替

わり立ち替わり人が代わって、いつまでもやっています。

若者たちが連発花火を手を持って、パンパン打ち上げています。あっちでもこっちでも。やけに手回しが良いと思ったら、物売りのおばさんが連発花火を売っているんです。私たちも思わず買って祝勝の儀式に参加いたしました。なんとこれが20連発くらいも出るんで景気がいい。焼き肉屋さんを見つけて二階に上がると、お客は私たちの他にはアメリカ人の一家だけ。三歳くらいの坊や赤いTシャツ着てほっぺに巴模様ペイントしているのがご愛敬。完全に今日は商売あがったりです。でも給仕してくれたアガシ（お姉さん）のほっぺたにも「Korea Reds!」と描いてありましたから、いいんでしょうね。とりあえず、誰も文句は言わない。

たいへん、貴重な経験ができたURCの職場旅行でした。はや17年も前のことではあります。

小牧 重己氏 福岡市住宅都市局 (2005.4~2007.3)

私は、平成17年度から19年度の3年間URCに在籍した。建築技術職として、市の都市計画・開発のマスタープランの策定に関わりたいという思いで入所したはずが、国際交流や水供給研究の機会を戴き、なぜか魅かれるように日韓における人々の日常交流研究業務に没頭することとなった。

その中で特に印象に残る研究は2つある。第1は、受託研究「道路を活用した日韓の交流活性化」である。将来の日韓の相互交流、観光振興などを目指した「日韓シーニックバイウエイ」を構築するため、日本車に乗って博多港から釜山港へ行き、その後、韓国南東部の慶尚南道をドライブし、また、釜山港から博多港へ帰るという4泊5日の気ままな旅で、交通ルールや施設などの利便性を調査する研究だった。走行実験も楽しかったが、やはり楽しみは韓国料理と人々とのふれあいだった。優しく、気さくに接してくれる人々が多いことに感動した。

第2は、自主研究「福岡・釜山圏における日常交流圏」のうちのNo3「釜山における日本建築物等の利用実態と評価」で、主に日本占領地時代の日本建築物を旅し、現在の利用状況や行政の保存計画、町の声などを調査する自発的な研究である。その中で「東菜（トンネ）別荘」という、かつては、大富豪「迫間房太郎の別荘」は、今はレストランとして利用されているが保存も拒否したため近々壊されると書いた文を見て、当時「うちの曾祖父が造ったもので、早速見に行きたい。」と言われた京都の茶道家から10年の時を経て、「別荘が遂に壊されると聞いた、記録調査のチームを作るので是非協力してくれ。」という連絡を受けた。突然の出来事に慌てふためきながら、約20名の専門家チームの一員となり大調査を行ったことが、感謝感激で今も思い出に残っている。

野口 誠氏 桜島ミュージアム (2006.4~2008.3) 研究所での思い出…韓国ドライブ

福岡アジア都市研究所（URC）には、平成18~20年度（2006~08年度）の3年間在籍し、当時ご一緒させていただいた皆様には大変お世話になりました。この間、各種調査研究事業に携わらせていただきましたが、一番印象に残っているのは「韓国でのドライブ」でしょうか。

当時、福岡~釜山間では往来者数が飛躍的に増大しており、これを「福岡-釜山日常交流圏」と捉え、日韓高速船でのアンケート調査などを行っていました。そんななか、「相手国をドライブして周遊するスタイルについて、今後の可能性を探れ」というスパイ大作戦ばり(?)の指令が下り、①日本から韓国にカーフェリーでマイカーを渡して運転する、②韓国でレンタカーを借りて運転する、の2つを並行して調べることとなりました。

一見、なんだか面白そうにも思えますが、調査前はけっこう不安だったんですよ！ 道路標識、左右通行など交通ルールも異なり、「もし事故なんか巻き込まれたら…」などと考えると心配になってきて、無事の帰国を内心祈っていた気がします。

で、実際に運転した感想は…？ 私は②のレンタカーを担当しましたが、最初はやはりちょっと怖かったですね。韓国はスピードを出すクルマが多くて…というか、そもそも最高速度の設定が日本より速く、周囲はビュンビュン飛ばしていく印象でした。しかも借りた車が大型サイズ。もちろん運転席も逆で、ちょっと戸惑いました。

でも都市部を出ると、道路は車も少なく走りやすく、すぐに慣れました。朝鮮半島南部のリアス式海岸は、海や山の風景も抜群。ヨン様でおなじみ、「冬のソナタ」ロケ地の植物園にも行きましたが、景色は最高でした！あ、もちろん調査の一環ですよ。

そして田舎の人々の素朴なあたたかさも印象に残りました。ある食堂では食後に、ちょうど旬を迎えていた柿をいっぱいカゴに盛ってきてくださいました。言葉はわからなくても、人々の気持ちをありがたく感じた次第です。

そうそう、現地の食事自体も素晴らしかったです。日本でよく知られた「韓国料理」だけでなく、海鮮鍋、お刺身など港町の普通の食事をたくさんいただきました。夜は、ビールにウイスキーを混ぜた「バクダン酒(しゅ)」の飲み方まで教わったり…あ、もちろんこれも調査の一環ですからね(?)。

結論としては、「さすがにマイカーを渡すのは、車両の通関手続き等の労力があってハードルが高い。でも、現地でレンタカーを運転するのはわりと現実的」ということになるのでしょうか。もちろん事前に国際免許の取得、ある程度の交通事情・地理の情報の入手は必要ですが、自由に行程を組めるクルマの旅は、真の現地らしさに触れたい「旅の玄人」にとっては、なかなかよい選択肢とも感じました。同時にそれは、相手国をより深く理解する手段となるかもしれませんね。

瀧山 直子氏 福岡市総務企画局国際部アジア連携課

(2006. 4～2014. 3)

URC30周年、誠におめでとうございます！10年前の2008年、20周年記念誌の作成を担当したことが思い出されます。

2006年4月から2014年3月まで、嘱託員として8年間お世話になり、『都市情報誌 f U+ (エフ・ユー プラス)』およびHP更新等の広報業務を担当しました。長く暮らしている福岡市ですが、まちづくりという観点から眺めたことはほぼ皆無。『f U+』計13号を発行し、都心部(博多駅・まちあるき)から周辺部(農村景観)と舞台を変え、硬(環境問題)から柔(まちかどイベント)まで多様なテーマで福岡のまちづくり、関連する他都市の事例などを取り上げました。そこで、民間・市民・学術・行政の方々とお会いし、皆様のまちづくりへの情熱や取り組みのお話を直に聴くという貴重な経験をしました。

そこから幾星月。福岡はどんどん変わってきていると感じます。

また、『研究紀要 都市政策研究』(Urban Policy Studies)では日

本語の報告書や論文の英訳を行いました。無謀な仕事を快く任せてくださった方々には本当に感謝



大学院の卒業式。

2016年9月ロンドンにて

しております。退職後の2014年9月から1年間、英国・ロンドンの大学院で技術翻訳および翻訳テクノロジーを学び科学修士号を取得しました。ひとえに、リサーチや翻訳、日本語での取材や原稿作成といった一連の業務を行ったURCでの経験があったおかげです。

URCの門をくぐってから10数年、自分では思ってもみなかったことができました。予測できないからこそ面白いことがある、これからもそうだといいなと思っています。

最後になりますが、URCおよびOG・OBの皆様の益々のご発展をお祈りしております。

大関 麻里子氏 福岡市総務企画局国際部アジア連携課（2007.4～2013.3）

6年間でのURCでの日々、嬉しいことも、大変だったこともたくさんあり、感謝でいっぱいです。そして、国際部での日々も気が付けば6年目。アジア太平洋都市サミットに12年間も携わるとは思っていませんでした。

皆様には大変お世話になりました。山崎さんには、「こんなこと・・・」って話しかけると、これは！と本をさっと紹介いただき、その豊富な知識に驚いていました。資料室は私にとってオアシスでした。

市場 留美氏 中央区保健福祉センター地域保健福祉課主査（権利擁護等担当）

（2011.4～2013.3）アジア都市研究所時代の思い出

2018年夏に25周年を迎えたアジア太平洋都市サミットが16年ぶりに福岡市で開催された。同サミットは1994年に福岡市が提唱して、アジア太平洋の都市による国を超えた都市問題の解決を目指す連携のため、アジア太平洋の都市を会員として会議が開催されてきたが、2006年から2013年までは（公財）福岡アジア都市研究所に事務局があり、2010年10月から2013年3月までの2年半の間在籍した。

当時は、2010年ウラジオストクサミット（ロシア）、2011年鹿児島実務者会議（日本）、2012年浦項サミット（韓国）と毎年市長会議と実務者会議を交互に開催し、国連ハビタットなどの国際機関幹部を来賓に迎え、多くのアジア太平洋の都市などの市長や関係者の参加を得ていた。

会議では、大都市での気候変動による災害や公害などが及ぼす影響やその対策について、会員都市から具体的な発表があり、意見交換が行われ、会議毎の都市宣言も行われて、現在に至っている。各国の制度や技術進展、都市の規模などの違いを超え、世界的な共通認識である「都市における持続可能な発展（Sustainable Development）」のため、同じ課題の解決のための都市間の連携を目指していた。

同サミット事務局は2013年4月から福岡市の直接所管となったが、同時点で、2015年熊本サミット（日本）、2016年バンコク都実務者会議（タイ）、2017年ウラジオストクサミット（ロシア）の会議を予定し、国を超えた都市間の連携、協力が深まっていた。

そのほか、国際視察研修と国連ハビタット共催のアジア都市景観賞の事務局も担うとともに、ホーチミン市社会問題研究所との研究協定締結、国連都市フォーラムでの発表などの広範な対海外業務にも従事し、福岡市の国際政策の一端を担う貴重な経験ができた。

都市の発展には海外の状況や国際機関の動向からも大きな影響があり、また都市の解題は国を超えて普遍であるため、課題解決のための都市政策には複眼的な視点が必要であることを学び、その後の業務にも生かすことができたことに心から感謝している。

岡田 允氏 都市経済社会研究所(株) (2010.4~2018.3) 充実した研究生活に感謝しています

九経調の常務理事・調査研究部長を退任し、福山女短大教授としての3年間を経て、当時の樗木理事長にお願いし、2009年から9年間URCの特別研究員をさせていただきました。

在任中は、福岡市の経済社会分野を中心に調査研究を行いました。在任初期には、「福岡市内企業・事業所のWLB推進支援施策に関する研究」等、ワークライフバランス推進政策に関する研究、中期には「『スタートアップ都市』形成に向けた政策課題に関する研究」など「知識創造」都市に向けての課題に関する研究、後期には国際人材教育都市機能の拡充・支援や地場中小企業の「越境Eコマース」振興支援政策など「福岡市におけるアジビネス支援政策に関する研究」に取り組むことができました。また、福岡市の政策に直結する「福岡市の将来人口推計」や「天神ビッグバン」など各種事業の経済波及効果算出も担当し、「福岡城市民の会」(通称)からの受託「福岡城・鴻臚館の復元・整備の経済波及効果の推計」を担当した時には、佐賀城、熊本城、名古屋城、掛川城、彦根城、金沢城などの調査・見学をさせていただき、無知であった日本の城について知ることができました。さらに、日韓海峡圏研究機関協議会行事への参加として韓国済州島や光州特別市にも行かせていただきました。最後の3年間は、市民研究員受け入れ事業のアドバイザーも担当し、市民レベルからの思いもよらないテーマに出会い、私の発想の広がりにつながりました。

九経調時代には、毎年4~5件の、テーマが異なる調査研究プロジェクトに入り、スポンサーとの折衝や締切時期の重なり等もあって、知的蓄積へのインプット時間の不足が悩みでしたが、URCでは、研究員がテーマを選び、パイロット研究またはフォローアップ研究として行う「個別研究」か、研究所として協働して取り組む「総合研究」に加わるという形が基本で、充実した研究生活を送ることができ、心から感謝しています。

柳 基憲氏 Global Connect Fukuoka(株) (2013.4~2018.3)

この度はURC設立30周年おめでとうございます。

在職中では、安浦先生をはじめ研究員の皆様とFDCの皆様には大変お世話になりました。URCで培ってきた5年間色々な事を学ばせていただきました。日本に来てから初めての職場でしたが皆さまが親切に指導してくださりその節はありがとうございました。今事業をしておりますが、URCで研究した内容が非常に役立っており、この経験が原点で今に繋がっていると感じています。

朝から夜中までデスクに向かってひたすら研究、論文を書く毎日でしたが、とても良い思い出となっています。ありがとうございました。

今後URCで働かれる皆様のご活躍とご健闘をお祈りいたします。

梶原 信一氏 城南区長(2012.4~2016.3) URC在職時についての雑感

私は、URCで成24年度から平成27年度まで常務理事・事務局長の仕事をさせていただきました。この間、都市政策やアジア交流ネットワークの業務に事務局として関わるほか、当時設立された産学官民で構成される「福岡地域戦略推進協議会(F.D.C.)」との連携や、都市データを専門的に収集、分析、発信する「情報戦略室」の立ち上げに携わりました。

日本全体が少子高齢化による人口減少、地域の衰退という大きな課題を抱える中で、ここ福岡の地から地域の成長と発展を目指した地方創世の先駆けともいえる取り組みが始められた時期ですが、URCにとっては地域に貢献する自治体シンクタンクとしての役割が強く問われていたときにもあ

たります。そのため、在任中は、常にURCの業務全般について見直しの余地がないのかを考えていました。事業や業務の見直しはそう簡単にいくわけではないことも多いのですが、検討した見直し案については、幸いにも、理解ある上司と優秀なスタッフに恵まれ、円滑に実現することができました。当時助けていただいた皆様に（デジタル）紙面を借りて深く御礼申し上げます。

見直しの中で最後の取組が、URC資料室の事業であった「ミニセミナー」（URCの会議室で行われる参加者約30人程度の小規模講演会）を、「ナレッジコミュニティ」としてリニューアルすることです。見直しの趣旨は、せつかく講師と参加者が近い関係にある「ミニセミナー」を、より講師や参加者同士が双方向的に交流できないかというものであり、アクティブラーニング型の「知のコミュニティ」の場となることを目指すものです。私自身は異動によりURCを離れたため実際の見直し後の事業には携われませんでした。H28年度以降、年4回ほど開催されています。今後も「ナレッジコミュニティ」がURCのことを語るうえで外せないユニークな事業として継続していかれることを期待しています。

唐 寅氏（1994.4～）アジア都市景観賞とともに歩んだ10年間

福岡アジア都市研究所が設立30周年を迎えました。20周年の時にあれこれと自分が携わっていた対中関係の業務を整理して報告しましたが、その後の10年間は、もっぱらアジア都市景観賞（以下ATA）事務局の業務に専念し、それにまつわる喜怒哀楽だけが鮮明に残っています。

このATAは、募集要項にも書いているように、「アジアの人々にとって幸せな生活環境を築いていくことを目的とし」、国連ハビタット福岡本部をはじめ、アジアハビタット協会（香港）、アジア景観デザイン学会（福岡）、そして福岡アジア都市研究所によって2010年に創設され、他都市の模範となる優れた成果をあげた都市、地域、大規模事業等をアジア各国・地域から募集・選考し、表彰する国際賞です。これまでの9年間に17か国・地域109団体を表彰し、今年で10周年を迎えます。

ATA設立当初は、中国や韓国をはじめとするアジアの人々に福岡市をPRし、ビジネスツアーの造成やインバウンド誘致につなげることを目的の一つに掲げていました。観光資源が乏しいといわれる福岡の魅力都市景観の視点から発掘し、海外のメディアに取り上げてもらうように仕掛けましたが、予想以上の大反響と大成功を収めました。

その後、インバウンド旅行が空前の勢いで急増したことに伴い、ATAが観光プロモーション的な意味合いを維持しながらも、募集・選考・表彰を通じて、アジア各地の景観形成の持つ可能性や価値を注目する方向にシフトし、アジアでの注目度がいっそう高まりました。

しかし、それと時を同じくして福岡市の財政事情が厳しくなり、授賞式の開催も中国の内陸都市銀川市に譲ってしまったため、ATAにおける福岡の存在が次第に小さくなりました。

今年はATAが10周年を迎える節目の年です。従来の募集・選考・表彰に加え、秋には香港で10年間の歩みを総括するための式典を予定しています。新しく生まれ変わるべくATAの未来像を関係者の皆様とともに描きたいです。

*肩書や所属は、平成30年度末現在のものです。